

異聞霧隱才藏



異聞霧隠才藏

定価290円

昭和 38 年12月18日 第 1 刷発行

著 者 中 田 耕 治

© Kozi Nakada 1963

発行者 西 村 俊 成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 横田製本株式会社

発行所 東 都 書 房

東京都 文京区 音羽町 3 丁目 19 番地

電話東京(942)1111振替(東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします

中田耕治

異聞霧隠才蔵

東都ミステリー

目次

第一部

第一章 間道の中……………5

第二章 姫の受難……………29

第三章 山峡の村……………43

第四章 名張の血……………57

第五章 白い狭霧……………82

第二部

第六章 遊里の女……………104

第七章 梓の告白……………135

第八章 江戸の町……………176

第三部

第九章 青色の笄……………228

終章 忍者の群……………270

あとがき……………291

装幀 中島靖侃
構成 福島祥介

第一部

第一章 間 道 の 中

1

山が崩れるような響きで、陣太鼓や法螺貝ほらがいがなりわたり、いたるところに無数の叫喚きようかんがわきあがっていた。

その叫喚のなかに、はるかな地軸をゆるがすようないきおいで、騎馬武者や徒歩かちの雑兵の黒い影が走っている。

はやくも火が放たれて、屋形の一部が空を焦こがしながら燃えさかっていた。真昼のような明るさのなかで、つづけざまに鉄砲の音が起り、いくつも悲鳴がわき

起っている。この屋形が敵の手中に陥るまで、もはや時間が残されているようには見えなかった。

「坂口兵庫さま、ご最期——」

気が狂ったように叫びながら走ってくる影があった。その背後に、くろぐろと重なりあう屋形の樹々を押しわけて馬のいななきがつづいた。

「屋形に火がついたぞ！」

その叫びは、肺腑はいふをえぐられるように絶望的な響きを持っていた。しかし、それもすぐに、人びとのひしめきあう音にかき消された。

「柱本和泉さま、ご討死！」

しかし、この屋形の内部には、そうした叫びが遠い潮鳴りのように聞えた。かたく閉ざした板戸が、あたりの物音をかかなりの程度に殺しているので、ほのぐらい広間は静かだった。

敷物をしきつめた上に、白装束を着た若い姫がすわっていた。その敷物は燃えるような赤で、かすかに

揺れる柑子^{かんじ}いろの燭に半面を照らされた姫の美しいおもだちによくうつっていた。その傍には、これも白装束の侍女たちが蒼白な表情でひかえていた。

広間は静まりかえって、あの潮鳴りのようななどよめきだけが、あとからあとから遠くよぎって行くのだった。

「姫さま、姫さま！ 一大事にござりまする。布由^{ふゆ}姫さま！」

不意に板戸の外でとりみだした侍女の声がして、姫は顔をあげた。

「ただいま表門が破られ、ご城代さま、討死を遂げられてござりまする」

「え？ 頼母が？」

姫は信じられないように驚愕の表情をうかべた。

「左馬允^{さますけ}を召すように！ すぐに……」

内藤頼母の討死は、もはや屋形の内部にはわずかな兵力しか残されていないことを物語っていた。あと

は、若杉左馬允のほかに、近習^{きんじゅう}、侍女をふくめて十数名にすぎなかった。

「はい。父もただちにこれへまいるものと存じます」

その侍女は、左馬允の女^{むすめ}、梓^{あずさ}だった。梓は切迫した表情のまま、しばらく無言で布由姫の瞳を見つめていた。そのとき、廊を走ってくる足音がして、甲冑に身をかためた若杉左馬允が板戸から姿を見せた。

「姫！」

左馬允は、その場に崩れるように両膝をつき、低く頭をたれた。

「左馬允、布由姫さまに申しあげます」

侍女たちのあいだから、ほとんど声にならない恐怖の叫びが起った。左馬允の顔の左半面が、柘榴^{ざくろ}をわったような醜^{みにく}い傷を見せていた。左馬允は、その顔をあげて、

「御父君、このたび、美濃^{みの}、関ヶ原においてご最期を遂げられましたことは、金吾中將（小早川秀秋）め

が、義をすてて約にたがい、内府公（徳川家康）に内通されたためとうけたまわります。さぞご無念に思召されたと存じますが、義のために石治少（石田三成）どのと兵をはかられましたことは、むしろご本懐でござりましょう。このうえは、われらもおともつかまつりますゆえ、姫君もご生害の覚悟をあそばしますよう……」

侍女たちは、声をおさえながら涙にむせびはじめた。ただ放心したように、柑子かんじいろの燭のゆらめきを見つめている侍女もいた。梓は泣かなかった。

布由姫は、左馬允の言葉が聞えなかったように頬の筋ひとつ動かさなかった。もはや何も見ていないような黒い瞳が、不思議な静けさをたたえていた。しかし、表情というものをまったく失ってしまっているようだった。この数日の衝撃が、あまりに大きなものだったからであらうか。

父、大谷刑部吉継が、この十五日、美濃の関ヶ原に

敗れ、自害したという知らせは、その翌日の深夜になってもたらされた。

関ヶ原の役は、この日、辰の刻（午前七時ごろから）にはじまり、午の刻（午前十一時ごろから）におよんでも、勝敗はわかれなかったが、小早川秀秋が家康の軍に内応した。大谷吉継は、秀秋の返撃に遇い、ただちに戸田重政、平塚為広の両隊をして、前面の敵、藤堂高虎、京極高知をすてて秀秋にあたらしめた。

戸田、平塚の両隊はよくたたかい、一度は秀秋をしりぞけたが、藤堂、京極、さらに織田有楽斎の兵に側面を合撃され、しかも、吉継の麾下きかにあった脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保らが、藤堂に应じて離反し、吉継の本隊をおそったため、遂にささえきれずして敗れたという。

悲報は、はじめ伝令によってもたらされたが、それが途絶えると、ぞくぞくと敗走してきた兵によって、三成の臣、島左近勝猛の戦死や、全軍が潰乱したのち

に、島津義弘が最後の攻撃に出たことが伝えられた。

昨日は、吉継の軍にしたがった木下頼継が戦場を脱してもどつたと聞いたが、兄の吉勝の消息は不明だった。

そして、今日は、はやくも敵が塩津街道を追撃してきたのだった。

「おそれながら、左馬允、介錯をつかまっています」

この左馬允の言葉の重大さを、十六歳の布由姫は理解していたのだろうか。美しいまなざしが、梓にむけられていた。そして、まったく表情の変化もなく、すっと敷物から立ちあがると、

「梓。戸をおあけ」

縁に面した板戸を開けさせた。ごうっと音がして、美しい炎が視野にひろがり、熱気が広間に流れこんできた。眼を閉じると、焰の明るさが残った。

鉄砲の音が、きわめて近くから起った。無数の銃弾が、廂にささり板を裂く。胸をぶちぬかれて、

「ぎゃあっ！」

と絶叫しながら、高い縁からころがり落ちる者があつた。

「それ、あそこに女どもがいるぞ！」

その声に応じて、門から黒い影が走り寄ってくる。こちらからも、その動きに激突して行く影があつて、炎が血しぶきになった。

悲鳴が起っている。

しかし、布由姫は何も聞いてはいないようだった。

「布由も……お父さまのところへまいります」

ほとんど聞きとれない声で、小さくつぶやきながら、その場に立ちつくして荒れ狂う炎のいろを見つめていた。

2

新田才蔵は、敵味方の死屍を踏み越え、追いつがる

敵の刃を払った。そして、夜のかぎりない闇のなかを走りつづけた。

はてしもなくつづく闇であつた。しかし、屋形の近くに出たとき、燃えさかる炎に、ふと気がつくと、いたるところにかかるい刀傷をうけて、黒の革具足もずたずたに裂けていた。

ここでも、血に狂つた無数の叫喚が、彼を押しつづむようにしてわきあがっているのだった。

この数日の戦闘は、ほとんど想像を絶していた。こんなことがあつていいのか。こんなばかげた、無意味なくさがあつていいのか。何に投げつけていいのかわからない憤りと、はげしい絶望にかられていた。しかし、その次にやつてきたのは、ひどい疲労だった。美濃から越前まで、山間、四十里以上を走りつづけたのだった。

その疲労のなかで、才藏は、自分の運命が、ほかの敗残の士卒とは違つた意味で大きく変化したことを考

えていた。

石田三成が、徳川家康に対して兵をあげたのは、この七月十九日だった。三成は、ただちに、信州上田の、真田昌幸を誘つた。

昌幸は、長子、信幸（のちの信之）、次子、信繁（幸村）にはかつた。その結果、信幸は、東軍、家康につき、昌幸、信繁父子は、西軍、石田三成に加担することになった。

七月二十七日、石田三成は、佐和山の居城において、昌幸の受諾の書状に接し、伏見に移つて返書をあたえた。

この返書には、当時、人心はかりがたく、家康を討つべき謀の泄れやすきをもつて、前に昌幸に告げなかつたことを謝し、近畿をすみやかに平定して、来春までに関東に兵を出す予定であるとなつた。

三成は、さらに、この当時、大坂にあつた昌幸の妻子が大谷吉継の尽力によって安全であること、自分も

遠からず大坂に赴いて丁重にこれを保護するとも書き添えたのだった。

真田信繁（幸村）は、大谷吉継の女を内室にむかえている。そして、長女を大坂に送っていたので、掛樋十蔵、望月六郎ほか数名を関西に急行させた。新田才蔵は、その一人に加えられていた。

望月六郎は、昌幸の密書を、無事に佐和山の三成に届けたが、才蔵は、伏見で掛樋十蔵とわかれ、当時、越前にあった大谷吉継に、信繁（幸村）の親書を届けた。そして、それ以後は、吉継の軍にしたがって美濃に出たのだった。

吉継が敗れたとき、才蔵は、もはや上田に帰るべき可能性がなくなったことを知った。

上田表の戦況はまったく不明だったが、才蔵が、この非常事態に適切な行動をとるべきだと判断したのは当然だった。

何よりもまず越前に出なければならぬ。そして、

主君、信繁（幸村）の内室の妹にあたる布由姫を救出しようと決心したのであった。

才蔵は、敗走する大谷吉勝の兵から、布由姫が緊急の場合は中ノ郷の屋形に移ることを知った。その屋形にむかう途中、手傷を負った大谷家の士卒が百姓におそれたり、袖夫に身をやつして街道を落ちて行くのに何度もおつかった。しかし、彼には、それらの人びとに声をかける余裕さえなかった。

中ノ郷の屋形は、坂ノ下、谷などの砦よりさらに奥の、山の中腹にあって屈強な場所だったが、警固の兵はわずかだったし、一ノ庄から逃げてきた女子供が多く、しかも、敵が山を越えて屋形の近くに迫ってきたので、混乱はその極に達していた。

暮、六ツ（午後六時）、陣屋の一部に火が放たれた。それが攻撃の合図になって、燃えさかる火焰のなかに、敵の騎馬武者や雑兵がくろぐろとした影になって動いていた。その火は、最後まで抵抗しようと決意し

た大谷家の人びとの心情のように、暗い闇を茜色に燃えたとさせていた。

敵、六百に対して、若杉左馬允と内藤頼母の手兵は、わずか百五十だった。

屋形の塀の破れから、ふらふらした足どりで歩いてくる鎧武者があった。炎にむけられた眼は、憎悪に血ばしっていた。

「理不尽なやつばらめ！」

その武者は、泣き叫びながら、大刀をふりまわしたが、塀の崩れに足をとられて倒れた。極度の疲労が彼をふたたび立ちあがらせなかった。

「何者だ！ 名のれ！」

その武者は、やっと顔をあげると、

「内藤頼母ぞ！ さあ、殺せ！」

しわがれた絶叫が、たちまち集って行った白刃の一つに消された。

才藏は、何か悪夢のようなものを見た思いで、足を

とめてその光景を眺めていた。

ぞくつと唇をふるわせて、われにかえると、火は、もう屋形の屋根に移っていた。まるで生きもののよう

に、ざわざわと音を立てる。それは、生きながら劫火に灼かれる人間の苦痛の叫びに似ていた。

才藏は、身をゆがめると、いっきに熱気のなかにおどりこんで行った。焼きつくされた廊に死体ごろごろころがっている。屋形の周囲の櫓をまわってふきあ

げる白い煙は、蛇のように赤い舌を見せて、屋形の内部にながれこんでゆく。

美しい炎のなかで、おびえきったまなざしに、恐怖のいろを表情にはりつけて逃げまどう女たち。その悲鳴が、暗い情念の持つ、もだえるような絶望を響かせている。炎のなかで、雑兵におそわれて、白い肌をさらしながら、髪をふりみだして逃げる女の姿もあった。その地獄図譜が、血の匂いと火の阿鼻叫喚を信じがたいほど無残なものにしていた。

屋形におどりこんだとき、大刀の打ちあう音を縫って、

「危いぞ！」

と、はげしく叫ぶ声があがった。

角柱の最上段から、廂の一部が火をふきながらぐずれ落ちてくる。すさまじい熱気が顔にあたった。

「逃げろ！」

その附近にいた人びとは、敵味方いりみだれて散ったが、革具足の一人が燃え落ちた材木に足をとられて、どうと倒れた。

才藏は、その火と熱気を避けたが、

「おのれ！」

という怒号と、同時に、すさまじい力でぶつかってきた者があって、鎧どおしが突き出された。

才藏はそれをかわしながら、急速に大刀をふりおろした。短い悲鳴があがった。

かなり離れた奥のほうで、女の悲鳴があがって

る。布由姫がいるかも知れない。自分でも予期しなかった想念だったが、それは熱気のように、才藏の全身を灼きつくした。

走りつづけた。

いきなり眼の前にあらわれた板戸を蹴り倒したとき、白い煙がごうつとながれ出してきた。手で鼻と口をおおいながら、その広間にとびこんだ。

部屋の隅に何かが倒れていた。

傍に走り寄ったとき、その無残な表情がひどい衝撃をもたらした。そこに倒れていたのは、あきらかに大谷家中の武士で、かなりの年配らしく、そこに脱ぎすてられた紺村濃こんむらじの具足の作りが、身分の高さをしめしていた。しかし、鎧直垂ひたれまでが裂け、顔の左側がぐしゃぐしゃに裂けて、肩ぐちにも血が溢れていた。胴巻たてまきを押しひろげ、脇腹に刀を突き立てながら力がつきたようだった。

その武士は顔をあげた。しかし、彼が投げかけてく

る視線には、すでに意識も消えかけて、才蔵を見かけることができなくなっているようだった。

「敵か、味方か……」

かすれた、低い声で、やっとそれだけの言葉を口にした。

「味方だ」

才蔵はいって、いそいでその武士を抱きあげると、

「布由姫さまはご無事か？」

と声をかけた。

その武士は、刀にかけていた手を離し、これもおびただしい血のりのついた胸もとをかきむしるようなしぐさを見せた。

「娘が……」

あとは聞きとれなかった。才蔵は、その耳もとに、「一刻もはやく、布由姫さまをお救いいたし、敵の眼をかすめて、大坂におつれ申すのだ。どちらにおわすのだ？」

「姫君は……」

その武士の顔に、かすかな表情の変化があった。しかし、口からはむなしいあえぎになって血がながれてきた。

この広間の近くにも、われがちに逃げまどう影と、いくつもの悲鳴になって重なりあう声がつづき、すさまじい炎のいろがあった。

「いってくれ！ 姫はどこだ！」

「姫を……裏の井戸に……」

「井戸に？」

「……間道に、なっている……」

もはや、まぎれもない死が、いちじるしく蒼白な^{かげ}りとなつて、冷たい蠟^{ろう}のように何の感情の動きもない、うつろなまなざしだった。

「若杉……左馬允……」

それだけの言葉が、わずかに意味をなして聞きとれた。そして、この武士はがくつと頭を落した。

才蔵は走り出した。

それからあとは、いまわしい悪気のなかを走りつづけているようなものだった。眼がさめてみると、夢の内容はすっかり空虚なものになっていながら、ひどく強い衝撃だけが残って、また眼を閉じるとそのいまわしい夢がよみがえってくるといった状態に似ていた。

何度か立ちはだかった敵を切りくずし、突き立てながら、屋形の内部を走りつづけ、奥の広間に進んだとき、不意に眼のさめるような刺繍を散らした衣裳が投げ出されていた。

また、板戸を蹴り開けると、顔を蒼白にした女たちが薙刀をかかえながら、さっと左右に開いた。

才蔵は、その奥に、白装束を着た若い女が立っているのを見た。その女の顔も血の氣を失っていたが、その瞳にはすみきったかがやきが宿っているようだった。

いきなり薙刀が切りつけてきた。才蔵はそれを引き

はずしながら、

「待て、味方だ！」

と、どなった。そして、その場に片膝をつくと、

「おそれながら、布由姫さまとお見うけいたす」

といった。そして、安堵の思いが堰を切って押し寄せてくるのを感じながら、

「真田左衛門佐信繁（幸村）、家臣、新田才蔵。これより、布由姫さま、大殿、安房守（昌幸）お屋形さまのもとに落ちのびられますよう供奉いたす。火急の折ゆえ、一刻もはやくここを立ちのかせられませい」
才蔵はいった。

3

どこもかしこも不気味な赤さにつつまれて、屋形は燃えさかっていた。

逃げ出そうとしてもがけばもがくほど、いっそう執

撈もちにからみついてくる火の流れ。どすぐろい煙の渦。

そのなかで、布由姫の侍女たちは逃げまどっていた。

才藏は、うっすらと紅を刷はいた唇をかるく開けて失

神している布由姫を抱きあげて、炎のなかを走りつづけた。

布由姫の乳房が具足の破れに押しつけられ、腕を動かすたびにその硬いまるやかさをつたえてくる。

「梓どの！」

才藏は叫んだ。

梓の声が聞えている。敵兵に遭遇したらしいが、それも薙刀をふるってしりぞけると、苦しそうに喘ぎながら才藏のうしろにつづいた。

屋形全体が一枚の壮麗な画面のように、夜気をくつきりと画って燃えあがっていた。裏門の附近では、夜気までが輝いていた。

「梓どの、井戸はどこだ？」

「あちらに——」

何度となく死屍につまづき、よろめきながら、しかと方角の見当もつかない井戸を探しもとめて才藏はあたりをうかがった。

屋形から廊下つづきに書院があり、さらに離れて四阿まの一棟が建てられている。木立はそのまま山にたなわいて、あたかも人工の庭にとけこむ自然を背景にしているように、それは広潤な印象をあたえていた。しかし、角の多い、苔むした石で造られた池、水面に深く枝をしなだれる樹々、石燈籠までが、金爛きんらん緞子のような色彩を帯びはじめている。その色彩は、刻々に輝やきを変じている炎の流れでもあった。

死体がいくつもがっている。

そこを走りぬけたとき、木立の前に立ちはだかつていた壁がいきなり蹴り開けられたように、低く石を積みかさねた井戸があった。

「井戸があったぞ！」

才藏は思わず叫んでいた。